

- Jordan 標準形について (その 1. 広義固有空間による方法) .

定義: サイズ $n \geq 1$ で固有値 $\alpha \in k$ のジョルダン細胞 $J(\alpha; n)$ を以下で定義する.

$$J(\alpha; n) = \begin{pmatrix} \alpha & 1 & \cdots & O \\ 0 & \alpha & \ddots & \vdots \\ \vdots & O & \ddots & 1 \\ 0 & \cdots & \cdots & \alpha \end{pmatrix}.$$

定理: $\forall A \in M_n(\mathbb{C}), \exists P \in GL_n(\mathbb{C}), P^{-1}AP = \bigoplus_{u=1}^t J(\beta_u; t_u).$

注意: この講義では簡単のために \mathbb{C} 上で議論するが, この仮定は本質的ではない.

注意: 定理の右辺を A のジョルダン標準形 (JNF) という. 適切な意味での一意性 (並び替えを除いて一意) もあるが, ここでは扱わない.

例: $n = 2$ のとき, JNF は次のどれか (ここで $\alpha \neq \beta$).

$$\begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \alpha \end{pmatrix} = J(\alpha; 1) \oplus J(\alpha; 1), \quad \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix} = J(\alpha; 1) \oplus J(\beta; 1), \quad \begin{pmatrix} \alpha & 1 \\ 0 & \beta \end{pmatrix} = J(\alpha; 2).$$

$n = 3$ のとき, JNF は次のどれか (ここで α, β, γ は相異なる).

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} \alpha & 0 & 0 \\ 0 & \alpha & 0 \\ 0 & 0 & \alpha \end{pmatrix} &= J(\alpha; 1)^{\oplus 3}, & \begin{pmatrix} \alpha & 1 & 0 \\ 0 & \alpha & 0 \\ 0 & 0 & \alpha \end{pmatrix} &= J(\alpha; 2) \oplus J(\beta; 1), \\ \begin{pmatrix} \alpha & 1 & 0 \\ 0 & \alpha & 1 \\ 0 & 0 & \alpha \end{pmatrix} &= J(\alpha; 3), & \begin{pmatrix} \alpha & 0 & 0 \\ 0 & \alpha & 0 \\ 0 & 0 & \beta \end{pmatrix} &= J(\alpha; 1)^{\oplus 2} \oplus J(\beta; 1), \\ \begin{pmatrix} \alpha & 1 & 0 \\ 0 & \alpha & 0 \\ 0 & 0 & \beta \end{pmatrix} &= J(\alpha; 2) \oplus J(\beta; 1), & \begin{pmatrix} \alpha & 0 & 0 \\ 0 & \beta & 0 \\ 0 & 0 & \gamma \end{pmatrix} &= J(\alpha; 1) \oplus J(\beta; 1) \oplus J(\gamma; 1). \end{aligned}$$

注意: JNF は制約が厳しく, n が小さいとき, JNF が何かは簡単に分かることが多い.

例: $A = \begin{pmatrix} 4 & -2 & -3 \\ -4 & 6 & 6 \\ 4 & -4 & -4 \end{pmatrix}$ のとき, $\varphi_A := \det(\lambda E_3 - A) = (\lambda - 2)^3$ (A の特性多項式) なので,

以下の命題から A の JNF は $J(2; 1)^{\oplus 3}, J(2; 2) \oplus J(2; 1), J(2; 3)$ のどれかと分かる.

命題: $A, B \in M_n(k)$ と $P \in GL_n(k)$ について, $B = P^{-1}AP$ ならば $\varphi_B = \varphi_A$.

証明: $\varphi_B = \det(\lambda E_3 - B) = \det(\lambda P^{-1}P - P^{-1}AP) = \det P^{-1} \det(\lambda E_3 - A) \det P = \varphi_A$.

例 (続き): $\dim\{\mathbf{x} \mid A\mathbf{x} = 2\mathbf{x}\} = 2$ である. 以下から A の JNF は $J(2; 2) \oplus J(2; 1)$ と分かる.

命題: $B = P^{-1}AP$ ならば $V_{A,\alpha} \cong V_{B,\alpha}$. ここで $\alpha \in k$ について

$$V_{A,\alpha} := \{\mathbf{x} \in k^n \mid A\mathbf{x} = \alpha\mathbf{x}\}, \quad V_{B,\alpha} := \{\mathbf{x} \in k^n \mid B\mathbf{x} = \alpha\mathbf{x}\}.$$

証明：以下は k 線形で $g \circ f = \text{id}_{V_{A,\alpha}}, f \circ g = \text{id}_{V_{B,\alpha}}$ が確認できる.

$$f : V_{A,\alpha} \rightarrow V_{B,\alpha}, \mathbf{x} \mapsto P^{-1}\mathbf{x}, \quad g : V_{B,\alpha} \rightarrow V_{A,\alpha}, \mathbf{x} \mapsto P\mathbf{x}.$$

注意： $n \geq 0$ を正整数の和で書くことを n の分割という. $n = 4$ だと

$$4 = 3 + 1 = 2 + 2 = 2 + 1 + 1 = 1 + 1 + 1 + 1 + 1$$

の 5 通りある. これが 4×4 の複素行列の固有値が 1 種類の JNF が 5 通りあると言っている.

注意： n の分割の個数を分割数と言って $p(n)$ と書く. 例えば $p(4) = 5$ だが, ラマヌジャンは $p(5n+4) \equiv 0 \pmod{5}$ を見出した. この話題は保型形式という数学の主要課題の 1 つと直接関係している. 先の合同式は

$$\sum_{n \geq 0} p(5n+4)q^n = 5 \prod_{n \geq 1} \frac{(1-q^{5n})^5}{(1-q^n)^6}$$

という恒等式からも従う. これをラマヌジャンの Most Beautiful Identity と呼ぶ人も少なくない.

注意：ラマヌジャンはインドの無名な事務員だった. 1913 年にハーディーに手紙を書いてケンブリッジに迎えられのだが, その手紙に

$$\frac{1}{1 + \frac{e^{-2\pi}}{1 + \frac{e^{-4\pi}}{1 + \frac{e^{-6\pi}}{\ddots}}}}} = \left(\sqrt{\frac{5 + \sqrt{5}}{2}} - \frac{\sqrt{5} + 1}{2} \right) e^{2\pi/5}.$$

という式があった (Rogers-Ramanujan 連分数). これは n の分割で

- 隣り合う差が 2 以上なもの
- 5 で割って 1,4 余る数を用いたもの

の個数はそれぞれ等しい, といった主張から従う (Rogers-Ramanujan 分割定理). 後者は

$$\sum_{n \geq 0} \frac{q^{n^2}}{(1-q) \cdots (1-q^n)} = \prod_{n \geq 0} \frac{1}{(1-q^{5n+1})(1-q^{5n+4})}$$

とも同値で (Rogers-Ramanujan 恒等式), ハーディーは It would be difficult to find more beautiful formula than... と後に書いた.

注意：JNF の存在証明には

- (1) 広義固有空間を用いる方法
- (2) PID 上の有限生成加群の構造定理を用いる方法

のいずれかが標準的で、ここでは (1) を紹介する。いずれの方法も $\mathbb{C}[x]$ が PID である、という事実が役割を果たす。(1) は大まかに以下の 2 ステップからなる。

- (A) 広義固有空間への分解 (ここに前回の不変部分空間と直和を用いる)。
- (B) 広義固有空間の解析。

定義: k を体, $A \in M_n(k)$ について $I = \{f(x) \in k[x] \mid f(A) = O_n\}$ は $k[x]$ のイデアルで, $k[x]$ は PID だから $I = (\Phi(x))$ となる $\Phi(x)$ で最高次の係数が 1 のものがただ 1 つ存在する。これを A の最小多項式と言って、この講義では $\Phi_A(x)$ と書く。

記法: $f(x) = a_0x^m + a_1x^{m-1} + \dots + a_{m-1}x + a_m \in k[x]$ について、

$$f(A) := a_0A^m + a_1A^{m-1} + \dots + a_{m-1}A + a_mE_n \in M_n(k).$$

注意: $I \neq \{0\}$. 実際, A は k^{n^2} の元と思えるから, E_n, A, \dots, A^{n^2} は必ず非自明な線形関係式を持つ (そうでなければ $\dim k^{n^2} > n^2$ となってしまふ). なお $\varphi_A(A) = O$ (ケーリー・ハミルトン定理) が成り立つので、実際は E_n, A, \dots, A^n が必ず非自明な線形関係を持つ。

注意: 整域 R において, $(a) = (b) \Leftrightarrow \exists c \in R^\times, a = bc$ だった。今, $(k[x])^\times = k^\times$ である。

補題: k を体, $A \in M_n(k)$ について $\Phi_A = \varphi_1 \cdots \varphi_s$ が $i \neq j$ ならば φ_i と φ_j は互いに素のとき, $W_i = \text{Ker}(F_{\varphi_i(A)})$ について $k^n = \bigoplus_{i=1}^s W_i$.

証明: $\psi_i = \Phi_A / \varphi_i$ について, ψ_1, \dots, ψ_s の最大公約数は 1 (ここに $k[x]$ が UFD を使った)。よって $\exists g_1 \in k[x], \dots, \exists g_s \in k[x], \sum_{i=1}^s g_i \psi_i = 1$ (ここに $k[x]$ が PID を使った)。

$A_i := g_i(A)\psi_i(A) \in M_n(k)$ とすると

- (1) $\forall v \in k^n, v = \sum_{i=1}^s A_i v$.
- (2) $\sum_{i=1}^s A_i = E_n$ かつ $A_i A_j = \delta_{ij} A_i$.
- (3) $W_i = \text{Im}(F_{A_i})$.

(2) の前半は明らか。これから (1) が従う。 $i \neq j$ なら $g_i \psi_i g_j \psi_j$ は Φ_A で割り切れるので $A_i A_j = O$ 。よって $A_i = A_i E_n = A_i (\sum_{j=1}^s A_j) = A_i^2$ 。以上で (2) の後半が示された。

(3) (\supseteq): $\varphi_i \psi_i = \Phi_A$ より $w = A_i v = g_i(A)\psi_i(A)$ について, $\varphi_i(A)w = O w = 0$ 。

(\subseteq): $w \in W_i$ について, $w = E_n w = \sum_{i=1}^s A_i w = A_i w$ ($\because i \neq j$ なら $\varphi_i | \psi_j$ だから)。

補題の証明に戻る。(1) より $k^n = \sum_{i=1}^s \text{Im } F_{A_i}$ だが、右辺は \bigoplus である。実際 $v = \sum_{i=1}^s v_i, v_i \in \text{Im } F_{A_i}$ について, $A_i v = A_i \sum_{j=1}^s v_j = A_i v_i = v_i$ となって, v_i は v から一意に定まる。

系: $A \in M_n(\mathbb{C})$ が $\Phi_A = (x - \alpha_1)^{\mu_1} \cdots (x - \alpha_s)^{\mu_s}$ ($i \neq j$ ならば $\forall k, \mu_k \geq 1$) のとき, $\exists P \in \text{GL}_n(\mathbb{C}), P^{-1}AP = \bigoplus_{i=1}^s B_i$ かつ $\forall i, (B_i - \alpha_i E_{\ell_i})^{\mu_i} = O_{\ell_i}$ (ここで ℓ_i は B_i のサイズ)

証明: W_i は F_A 不変である。

注意：以下 $A \in M_n(k)$ がべき零のとき、 A の共役が $\bigoplus_j J(0; m_j)$ の形にできることを示す。そのためには、べき零自己線形 $f: V \rightarrow V$ (つまり $\exists m \geq 1, f^m = 0$) を考えると見通しがよい。

補題 A：自己線形 $f: V \rightarrow V$ について、 $f^m = 0, f^{m-1} \neq 0$ のとき、 $W_i = \text{Ker } f^i$ について

$$V = W_m \supseteq W_{m-1} \supseteq \cdots \supseteq W_1 \supseteq W_0 = \{0\}.$$

証明：ある $1 \leq i \leq m$ について、 $W_i = W_{i-1}$ とすると、 $\forall v \in V, f^i(v) = f^i(f^{m-i}(v)) = 0$ より $f^{m-i}(v) \in W_i = W_{i-1}$ 。よって $f^{i-1}(f^{m-i}(v)) = 0$ で $f^{m-1} \neq 0$ に矛盾。

補題 B：単射線形 $g: W_1 \rightarrow W_2$ について、 $w_1, \dots, w_\ell \in W_1$ が線形独立ならば $g(w_1), \dots, g(w_\ell) \in W_2$ も線形独立。

証明：容易。 $\sum_i c_i g(w_i) = 0$ ならば $g(\sum_i c_i w_i) = 0$ 。 g は単射なので $\sum_i c_i w_i = 0$ 。 w_1, \dots, w_ℓ は線形独立なので $\forall i, c_i = 0$ 。

補題 C：補題 A の続きで、 $2 \leq i \leq m$ について、 $W_i = U_i \oplus W_{i-1}$ と U_i を取ると、 $f(U_i) \cap W_{i-2} = \{0\}$ (特に $f|_{U_i}$ は単射である)。

証明： $u \in U_i$ かつ $f(u) \in W_{i-2}$ なら $f^{i-1}(u) = 0$ 。故に $u \in W_{i-1} \cap U_i = \{0\}$ 。

toy model：補題 A の設定で $m = 3$ の場合を扱う： $V = W_3 \supseteq W_2 \supseteq W_1 \supseteq W_0 = \{0\}$ 。

$W_3 = U_3 \oplus W_2$ となる U_3 を取って基底を v_1, \dots, v_{r_1} とする。補題 C より $f(U_3) \cap W_1 = \{0\}$ で、補題 B より $f(v_1), \dots, f(v_{r_1}) \in W_2$ は線形独立だったから、 $W_2 = U_2 \oplus W_1$ となるように $f(v_1), \dots, f(v_{r_1})$ を延長して U_2 の基底 $f(v_1), \dots, f(v_{r_1}), v_{r_1+1}, \dots, v_{r_2}$ を得る。補題 C より $f(U_2) \cap W_0 = \{0\}$ で、 $f^2(v_1), \dots, f^2(v_{r_1}), f(v_{r_1+1}), \dots, f(v_{r_2}) \in W_1$ は線形独立だったから、 $W_1 = U_1 \oplus W_0 (= U_1)$ となるように延長して、 U_1 の基底 $f^2(v_1), \dots, f^2(v_{r_1}), f(v_{r_1+1}), \dots, f(v_{r_2}), v_{r_2+1}, \dots, v_{r_3}$ を得る。さて

- $1 \leq i \leq r_1$ について、 $P_i = \langle f^2(v_i), f(v_i), v_i \rangle$ は f 不変で、表現行列は $\begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ 。
- $r_1 < i \leq r_2$ について、 $Q_i = \langle f(v_i), v_i \rangle$ は f 不変で、表現行列は $\begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ 。
- $r_2 < i \leq r_3$ について、 $R_i = \langle v_i \rangle$ は f 不変で、表現行列は (0) 。

つまり、このように取った V の基底について、 f の表現行列は

$$J(0; 3)^{\oplus r_1} \oplus J(0; 2)^{\oplus (r_2 - r_1)} \oplus J(0; 1)^{\oplus (r_3 - r_2)}$$

である。一般の場合も同様だが、記号が煩雑になるため講義の説明としてはここまでしておく。

$$U_3 : \boxed{v_1, \dots, v_{r_1}}$$

$$U_2 : \boxed{f(v_1), \dots, f(v_{r_1})} \quad \boxed{v_{r_1+1}, \dots, v_{r_2}}$$

$$U_1 : \boxed{f^2(v_1), \dots, f^2(v_{r_1})} \quad \boxed{f(v_{r_1+1}), \dots, f(v_{r_2})} \quad \boxed{v_{r_2+1}, \dots, v_{r_3}}$$